

シリーズ わがまちの文化財①1

町天然 ナウマン象の臼歯化石 昭和55年7月21日指定

昭和47年7月、津口で前年に行われた河川改修工事により掘り上げられた廃土の中から発見されました。

ナウマン象は、洪積世後期（5万年～30万年前）の日本の最も代表的な陸上哺乳類で、瀬戸内海海域や日本海海底などから数多くの化石が見つっていますが、中国地方内陸部からの出土は貴重です。

この化石が発見された周辺の丘陵には、洪積世前期と推定される山砂利層が広く分布しており、その後地盤の隆起と浸食が起きて盆地ができ、ナウマン象がいた洪積世後期にはその盆地に湖沼があり、その湖沼堆積層中にナウマン象が埋まったと考えられています。発見された化石は、咀嚼面の左右の摩滅の度合いの相違や、4すじ残る咬板の高さの変化などから、左上顎の第二大臼歯ではないかと推定されています。

発見地の周辺からは、時代は異なりますが、大型のカキの化石や珪化木（木の化石）などの化石も出土しており、地形が形成されていく様子の一旦がつかえる場所として注目されています。



シリーズ わがまちの文化財①2

町重文 観音堂・御影堂・護摩堂 昭和59年5月15日指定

観音堂（本堂）と御影堂（別名：大師堂）は元禄15年（一七〇二年）に、護摩堂は寛文7年（一六六七年）に再建されたものです。虹梁に彫られた渦巻きや若葉模様の彫刻や木鼻のなどが、この時代の特徴をよく表しています。

観音堂と御影堂の再建は火災焼失の2年後にされており、再建には、広島大工57人のほか、木挽3人、甲山大工4人があつたことがわかっています。消失後短期間での再建や、地元大工の関わりを見ても、大田庄解体後も、人々の心の拠り所として、篤い信仰を集めていたことがわかります。

境内では、毎年4月20日に火渡り行事が行われ、県重文の絹本着色弘法大師像の年に一度のご開帳もあります。



御影堂の虹梁  
観音堂（手前）と御影堂（奥）

